

ドル/円相場のトレード戦略

【ドル/円 週足】



■中期展望

昨年 2018 年のドル/円相場は、当初想定していたように 2017 年と同様のレンジ相場が継続しました。

年間の値幅は 10 円を下回り過去最少、2017～2018 年の 2 年間を通して値幅は 14 円に満たず過去最少となり、市場のボラティリティから収益を得ようとするディーラーにとっては極めて厳しい環境となりました。

その大きな要因としては、絶好調だった米国の経済状況にもかかわらず、年初に米国の政策への不透明感からドルが下落したこと、そして年末には米金利のフラットカーブ化やそれに伴う米国株式の大幅下落、米中貿易摩擦の激化などのリスク要因が相次いだことでドルの上値が抑えられたことが挙げられるでしょう。

米国経済が強調であり利上げ予測が続くためにドルロング・ポジションが蓄積される中でもドルが大きく上昇しないという現象は、ドル高派にとって想定しにくい状況であったと思われます。

そのため、本年年明けの 1 月 3 日に 108 円を割り込むと損切りのドル売りを巻き込みながら、ドル短期に 4 円以上の下落という動きが引き起こされました。

その後、1 月の米 FOMC では声明文から追加利上げのバイアスが削除され利上げ継続という政策スタンスが大きく変わったことにより米国株式およびドルは持ち直しました。

また、米経済指標は好調を維持するものも多く、良好なファンダメンタルズのなか金利が低位安定

ドル/円相場のトレード戦略

するという適温相場が再び始まったとの期待が強まりました。

さらに6月のFOMCで米国が利下げ方向へ政策変更したことが明確となり、実際に7月のFOMCでは10年ぶりの利下げが実施され、9月のFOMCでも追加緩和が実施されたことでドルの上値は重い動きとなっています。

ただし、米国の追加利下げ観測が残るものの、その下げ幅は限定的との見方が強まり、また米国景気はまだ雇用を中心に成長を維持しており、ドルが一方向的に売り込まれる経済状況にありません。したがって、当面は105円～108円水準で、次の方向性を探る動きが続きそうです。

■短期展望

先週は、106円後半でスタートした後、米中閣僚級協議を巡る報道に一喜一憂する展開となりました。部分合意など一定の進展を期待する向きが多く、徐々にドルは値を上げ108円台を回復、週末には実際に部分合意が伝えられたことで108円62銭まで上昇し、NYを引けました。

今週も、先週の流れを引き継ぎドルの底堅い動きが予想されます。ただし、米中通商問題での根本的解決には程遠く、今後もドルの上値を抑える要因となるため、ドルの上昇も限定的なものにとどまりそうです。

現状、200日移動平均が109円10銭水準にあり、目先の上値めどとして意識されるでしょう。したがって、今週のレンジは107円半ばから109円水準を想定します。